

モダリティ別に見る 画像診断の最新動向

企画協力: 藤井進也 鳥取大学医学部附属病院放射線科講師

子宮頸がんや体がん、子宮筋腫などの婦人科疾患では、低侵襲でQOLに優れた治療が求められており、それを実現するための早期発見には、画像診断が大きな役割を果たします。近年、ハードウェアやソフトウェアの進歩により、MRIをはじめとして各種モダリティの特長を生かした診断技術が臨床応用されるようになってきました。そこで、Feature 2のFemale Pelvis Imagingでは、婦人科疾患におけるCT、MRI、PET/CTの最新技術と臨床的有用性についてご報告いただきます。本特集が婦人科疾患と闘う医療者にとって有益なものとなり、患者QOLを向上させるものとなれば幸いです。

Women's Imaging 2012

Feature 2 Vol.4 Female Pelvis Imaging

I 総論

骨盤内女性臓器疾患における 画像診断の進歩

藤井 進也 鳥取大学医学部附属病院放射線科

画像診断の分野は多岐にわたっており、それぞれの分野について知識を深めるのは大変な作業である。診断精度を上げるには、病理学的知識やその他の臨床的な知識にも精通することは重要であるが、画像所見に精通しておくことがきわめて重要なことは言うまでもない。しかしながら、今日の画像診断の進歩はめざましく、婦人科領域においても、これまで臨床応用が難しかった、神経放射線領域を中心に用いられてきた新たな技術が応用可能となってきている。したがって、その技術に関する理解に基づいて画像所見を正しく解釈できなければ、正し

い診断をすることは困難である。このような観点から、日進月歩の著しい画像診断技術の進歩とその臨床応用について理解を深めるために、今回の特集を組ませていただいた。



提示した症例は、新しい技術に関する知識が重要であると痛感した症例である(図1)。症例は20歳代の女性、増大傾向のある左卵巣腫瘍でMRIによる精査が施行された。乳腺腫瘍の手術歴がある。左卵巣にT1強調像で低信号、T2強調像でやや高信号を呈する充実性腫瘍を認め、ダイナミックスタディでは

早期濃染、遷延性に造影された。線維腫は否定的と考えたが、莖膜細胞腫や転移性腫瘍の可能性はあると考えた。

拡散強調画像では高信号で、ADC mapは低下していた。拡散強調画像の駆幹部疾患への応用は、婦人科疾患の読影の際にも少なからずの影響を与えたが、その解釈には注意が必要な場合もある。悪性腫瘍は拡散強調画像で高信号を呈することは広く知られているが、良性腫瘍でも高信号を呈することがある。卵巣腫瘍でも、線維莖膜細胞腫の一部で高信号を呈することが知られている¹⁾。拡散強調画像でも、良悪性